



いわさきちひろ没後35年 出版記念展 ちひろと一茶

●2009年3月1日(日)～5月12日(火) 主催：安曇野ちひろ美術館、信濃毎日新聞社 協力：一茶記念館 協賛：株式会社ビー・クス

句画集『ちひろと一茶』の出版を記念して開催される本展では、小さな生命への愛情や心のふるさと・信州への想いを感じさせる、小林一茶の句といわさきちひろの絵を、ともに紹介します。絵と句の時代を超えた組み合わせによる新たなイメージの広がり、信州ゆかりの作家の個性の響きあいをお楽しみください。

ちひろと一茶

小林一茶は、1763年に長野県上水内郡信濃町柏原に生まれた、江戸時代を代表する俳人の一人です。幼くして生母を失った一茶は、継母との折り合いが悪く、15歳の春に江戸へ奉公に出されます。20歳を過ぎた頃から俳句の道を目指すようになり、30歳から36歳までは、関西・九州・四国への俳句修行の旅に明け暮れました。一茶は、虫や小動物、子どもへ向けた愛情を詠んだ親しみやすいものをはじめ、個性的な俳句を2万句以上残しています。庶民の立場から、飾り気のない率直な言葉で詠まれた句には、素朴な人柄や、実生活における喜怒哀楽すべての感情が、素直ににじみ出ています。

ちひろは、若い頃から一茶の俳句に親しみ、句のなかのユーモアと反骨精神、小さなものを見つめるやさしさが好きだと語っていました。柏原に近いという理由もあって手に入れた、黒姫高原の山荘

の壁には、「瘦蛙やせがえるまけるな一茶いっさ是これに有あり」の拓本の掛軸が飾られていました。

ちひろと俳句

「梓月しげつ」の俳号を持つ父・正勝が、折々句会を開いていたこともあり、ちひろにとっても俳句は身近なものでした。「五・七・五」というわずか17音で綴られる俳句は、受け手の読み方によってさまざまな解釈が可能です。情景を自由に想像することで、一つの言葉の意味に、深い奥行きが生まれます。特に、季節を象徴する言葉である「季語」は、語句の背景にある歴史的な意味に、個人の記憶や体験が重なり連想が連なっていくことで、受け手のイメージをより一層広げていきます。

「自分の絵は俳句に似ている」と語っていたちひろ。説明的な要素をできるだけ省き、余白を活かして描かれたちひろの絵もまた、見る人が自由に作品を味わい、感じる余地を残しています。

春の芽吹きを思わせる、やわらかな萌黄の色使いが印象的な「春の野原」(図1)。画面上を斜めに走る大胆な筆線のかすれと、背景の色の濃淡によって、光にきらめく草むらと風のそよぎが表され、溢れるような自然の息吹が、絵全体から感じられます。ちひろの絵には、身近な自然のモチーフや、変化する光や風の表情を、四季の移ろいのなかで敏感に

感じ取り、描いているものが多くあります。作品に触れる人が、五感を通じて季節の記憶を甦らせることで、絵のなかの風景は、より豊かに広がっていきます。

生きとし生けるものを見つめて

「あの月をとつてくれると泣子なぐこ哉かな」など、子どもを詠んだ句でも知られる一茶は、54歳にして初めての子を授かりました。以降、わが子を題材にし、幼い子どもの愛らしい仕草を多くの句に詠んでいます。しかし、生まれた4人の子は、幼い時期に次々と亡くなり、家庭的には生涯恵まれませんでした。

愛娘あいなととの誕生と死別を軸に、57歳の1年の折々の出来事を綴った句文集『おらが春』には、「生きし生けるもののみ、蚤しらみにいたる迄まで、命をしきは人に同じからん」という一茶の言葉があります。一茶は、小動物や植物に向けて、人間と等しく親愛の心で語りかける句を詠みました。小さき者、弱い者、目立たない者の心を、慈しみをこめて見つめる温かなまなざしは、ちひろの絵の世界に通じています(図2)。また、「雀すずめの子ここのけそこのけ御馬ごまが通る」といった、権威に束縛されない自由な作風の句は、独自のユーモアや反骨精神とともに強烈な個性を持った言葉として、現代人の心に、今も生き続けています。(屋代亜由)

●展示室4

生誕100年 夢と記憶の画家 茂田井武展

●2009年3月1日(日)～5月12日(火)

後援 日本国際児童図書評議会、日本児童出版美術家連盟、絵本学会、財団法人日本図書評議会

茂田井武の生誕100年にあたる2008年には、ちひろ美術館・東京で大規模な展覧会を開催したのははじめ、画集や絵本の新刊、復刊も相次ぎました。本展では、約160点の出品作品のうち東京会場とは3分の1の作品を入れ替え、その画業の全貌と人物像を紹介します。

夢と記憶の破片

茂田井武にとって、記憶と夢はイメージの源泉でした。「『その時のそのまま』と私を納得させる雰囲気、これは月と共に日と共に暖められて次第に朦朧な輪郭から鮮明度を加えていく。現像液の中で印画紙を揺すぶっているようなもので、もしその時それ以上の濃度でしか映像が現れない場合はそこまでを第一号として保存し次の機会のデッサンにゆだねる。ピンボケ印画は回を重ねるごとに自分の意に添ってくれる。」と、茂田井は語って

います。幼少時代(図1)や、欧州放浪の旅での記憶(図2・3)、夢で見た光景など、自分のなかのかけがえない印象を画帳や日記に描きとめ、繰り返し絵にしました。その絵は、彼自身のごく私的な光景でありながら、見る人の心の奥底にある懐かしい光景を、切ないほどに呼び覚まします。

童心の画家

茂田井が子どもの本で活躍したのは、戦時下にあった1941年から、2度の出征をはさんで、亡くなる1956年までの10年余りでした。戦中戦後の混乱のなかで紙や印刷の質は悪く、出版に多くの制約があった時期に、絵本や児童雑誌、童話集などにおびただ夥しい数の絵を描いています。それは彼が3人の子の父親となり、共に過ごした時期にも重なります。我が子の存在は、放浪者のような生き方をしてき

た茂田井のなかの父性と、柔らかな童心を呼び覚ましました。日記には次のようなことばも記されています。「赤子、小さい我が再来、暗愚粗雑なる汝の父はやがて終らん そうしたら誰がおまえをみてゆくか、どうか地球なる大母性のあやかしを受けて育っていってくれ」。晩年、病床で描かれた絵には、ますます豊かな詩情とユーモアが息づき、絵本の草創期の礎として後に続く画家や編集者に大きな影響を与えました。

没後半世紀を越える今も、奈良美智や片山健、荒井良二等、現代を代表する美術家や絵本作家が、茂田井武の画集*にその絵の魅力を語ることを寄せています。懐しく、今も新しい、茂田井武の世界をご覧ください。(上島史子)

*『茂田井武美術館 記憶ノカケラ』

2008年 講談社・刊



やぎと男の子 1968年



すみれのなかのあばあさんと少女 1972年



図1 春の野原 1972年

ひとつ葉の中より吹や春の風



図2 草むらの少女と小鳥 1971年

我と来て遊べや親のない雀



海辺の小鳥 1972年

亡母や海見る度に見る度に

※一茶の俳句は、信濃毎日新聞社刊「一茶全集」第一巻（発句）の表記に従いました。

●展示室4



図1 絵物語「宝船」より 1939年



図2・3 画帳「古い旅の絵本」より 1944年



図4 「セロひきのゴージュ」より（福音館書店） 1956年

●茂田井武（1908～1956）
東京・日本橋の大きな旅館に生まれる。23年関東大震災で生家が全焼。中学卒業後、太平洋画会研究所、川端画学校などで絵を学ぶ。30年シベリア鉄道で渡欧、33年に帰国。職を転々とした後、成人雑誌の挿し絵を描く。46年日本童画会入会。54年小学館児童出版文化賞受賞。



図5 「ねむいまち」 「キンダーブック」1954年12月号 1954年

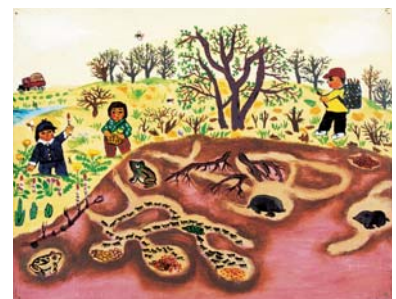


図6 「つちのなか」 「キンダーブック」1956年3月号 1955年

2009年 ちひろ美術館の活動について

安曇野ちひろ美術館館長 松本 猛

今年の1月、うれしい知らせが届きました。安曇野ちひろ美術館開館の翌年、1998年に近隣的美術館や自治体とともに立ち上げた安曇野アートライン推進協議会が「信州イノベーション大賞」（信州大学主催）に選ばれたのです。

イノベーションという言葉は、日本では「技術革新」という意味で使われることが多いですが、本来は「新市場」「新資源」「新経営理念の開拓」など、幅広い意味を持って使われます。たしかに安曇野アートラインは、一館だけではできない広報宣伝活動や、地元の人も観光客も参加できるイベントに取り組むなど、今までにない発想で美術館活動の連携を図ってきました。そのなかで、雑誌やテレビなどの企画にもたびたび取り上げられ、安曇野の知名度とイメージアップに貢献してきました。受賞理由は、地域経済の発展に寄与したことが高く評価されたからだそうです。

しかし、これからの時代の美術館は、今まで以上に難しい運営が強いられます。世界的な経済危機によって、日本だけでなく世界中の美術館が困難に直面するでしょう。企業が支えている私立美術館は、本業の危機のなかで文化支援事業を縮小せざるを得ません。公立美術館もかつてないほどの税収の落ち込みのなかで、文化予算が厳しく削られ始めています。美術館は人々の文化的、芸術的欲求に応えるためのものであると同時に、芸

術作品や文化財を後世に伝える使命を持っています。美術館の運営が困難になるということは、収蔵作品の散逸にもつながるのです。

厳しい条件はちひろ美術館も同じです。ちひろ美術館は入館料収入や販売物収入、いわさきちひろの著作権から生まれる印税収入によって運営されています。不況によって入館者が激減し、書籍やグッズが売れなくなれば、運営が困難におちいります。

もちろん、ちひろ美術館がこの数年で危険な状況におちいるということはありませんが、友の会の皆さんをはじめ、ちひろ美術館を支えてくださる方々に美術館の紹介をしていただき、また、知人友人を誘ってちひろ美術館を訪ねていただければ望外の幸です。私たちは、展示をはじめ、さまざまな分野で館の充実を図り、皆さんをお迎えするべくできるだけの努力をいたします。

2009年の活動

ちひろ美術館にとって、今年最大のイベントは、安曇野ちひろ美術館で建設中だった新収蔵棟が完成し、機能し始めることです。新収蔵棟は716㎡で、これまでの3倍の収蔵庫と書庫、資料研究室があります。展示室が大きくなるわけはありませんが、美術館の心臓部ともいえる研究や企画などの美術館活動が機能的に進めることによって、東京、安曇野

の両館の展示の質的向上に確実につながるはずですが、また、作品、資料のコレクションを継続的に進め、将来にわたって優れた絵本作品、資料の継承のために寄与できる空間的保障ができました。

展示については、今年は出版と連動した企画がたくさんあります。講談社から3月に出版される『ちひろ 花の画集』は東京館の3月からの展示に、同時に出版される『ちひろ いのちの画集』は安曇野館で5月、東京館では9月の展示になります。

信濃毎日新聞社から3月に出版される『ちひろと一茶』は安曇野館の3月からの展示に、河出書房新社から5月に出版予定の『ちひろの昭和』は5月の東京館での展示と連動します。

また、ミュンヘン国際児童図書館が、世界30カ国72人のイラストレーターに描きたい絵本の表紙を描いてもらい、実現した「架空の絵本展」は本邦初公開となります。

さらに、東京館の夏の展示では、新収蔵作品「ブリジット・スールデルの肖像」が初公開される「ちひろとローランサン」展が、マリー・ローランサン美術館の全面協力によって実現します。

厳しい社会情勢のなかでも、ちひろ美術館はイノベーションの発想を持ちつつ、歩みを止めることなく絵本文化の発展と、子どもの幸せと平和を大切に活動を着実に続けてまいります。

●多目的ギャラリー

「フォト×俳句」展紹介

●2009年3月1日(日)～5月12日(火)

「フォト×俳句」は、写真と俳句を組み合わせて楽しむ、新しい文化です。デジカメや携帯電話のカメラを利用し、気軽に制作ができることから、若い人たちを含め、幅広い世代から注目を集めています。

安曇野ちひろ美術館では、「出版記念展 ちひろと一茶」にちなんで、信濃毎日新聞が連載する「フォト×俳句」コーナーに掲載された作品と、そこで選者をつとめる写真家・中谷吉隆氏と俳人・坊城俊樹氏の未発表作品2点を含む、全40点を前期・後期に分けて展示します。

「異次元の扉をさがす夏休み」(図1)では、異次元への扉がマンホールという意外性が魅力です。これは、日常から非日常への思いが強まる夏休みならではの作品。このマンホールに描かれているの

は、お城や桃など日本的なモチーフですが、場所はどこでしょう。黄色いアスファルトの色が異国風情にあふれ、想像がふくらみます。



金田孝子 (図1)

直截的に写真を説明したり、俳句の情景をそのまま撮影するのではなく、互いに付かず離れずの関係で、見る側の想像力をかきたてる。そこに、「フォト×俳句」の魅力と特徴があると、選者の中谷氏は語ります。

「木枯らしよ此処が仕事場胸をはる」(図2)は、不況下に吹きすさぶ木枯らしにもめげず、街頭に肌身をさらすマネキンのさまが、句とよく響き合っています。日常の情景のなかに、鋭敏に時世をとらえて魅力的です。



西村美枝 (図2)

俳句と写真のコラボレーションが生み出す新しい世界を、どうぞお楽しみください。

(松本 麻野)

ちひろを 訪ねる旅③

ヨーロッパ旅行4
イタリア・ヴェネチ
ア、アッシジ、ナポ
リ、ローマ



ポローニャのレストランにて
4月14日、ヴェネチアを立ち、フィレン
ツェに向かう一行は、途中、ポローニャ
で昼食休憩をとっている。メニューは、
「肉の上にベーコン、ソースかけ、ジャ
ガイモのマッシュ、菜の油炒め、オレ
ンジュース」と文江は記している。

岩崎文江、ちひろ母娘は、旅行団
の一行とともに、4月9日マド
リードを立ち、旅の最終目的地で
あるイタリアに入ります。ニス、
ミラノを経由して12日にヴェネチ
アに到着しますが、この頃には、文
江も持ち前の快活さを取り戻して
います。ヴェネチアのホテルは、部
屋からの眺めがよく、入れかわり
立ちかわりに画家たちがスケッチ
ブックを抱えて母娘の部屋を訪れ、
人好きの文江を喜ばせました。

ちひろも母とゴンドラに乗り市
内見物をして、水都を楽しみました。

14日、ヴェネチアを出発、一行
はフィレンツェに向かいますが、
途中、昼食の休憩をとったのがボ
ローニャでした。世界最古の大学

があるこの街は、今や絵本の国際
見本市（ブックフェア）と絵本原
画展で知られていますが、フェア
がはじまるのが翌1967年、ちひろ
が『ことりのくるひ』で同展のグ
ラフィック賞を受賞するのが73年
ですから、当時のちひろには想像
もできぬ縁でした。

ちひろは、フィレンツェ、アッ
シジ、ナポリ、ローマと歴史ある
美しい街や美術館を訪ね、この間、
代表作となるスケッチ群を残して
います。それらの作品を見ると、
訪れた町々の空気を捉え、ヨー
ロッパの落ち着いた色彩の深まり
を捉えていることがわかります。
この経験は、後の作品に有形無形
に影響を与えました。

4月25日、一行は無事33日間の
長旅を終え、羽田に到着します。
空港には、夫・善明の母くらと猛、
妹夫婦のほか、出版社の人たちも
迎えにきていました。

旅行中の写真を見ると、改めて、
当時の海外旅行が、今とは比較に
ならないほど大変なものであった
ことがわかります。旅先の文江や
ちひろは、いつもきちんとスーツ
を来て、帽子と手袋という正装で
した。海外旅行は当時、ほとんどの
人が知ることのない特別な体験。
旅を終え、文江が周囲の人々に、
「もう死んでもいい」と、その喜び
と娘への感謝を語っていたという
のも、あながち大げさとは言えな
いものでした。（竹迫祐子）

ひとこと ふたこと みこと

館外展会場の感想 ノートから

安曇野館のノートに加え、昨年
行われた2つの館外展のお客様
の声を紹介します。

- 2008年9月2日～12月14日
相田みつを美術館
「相田みつを&いわさきちひろ
コラボレーション展」
- 2008年12月15日～12月28日
ふくい南青山291
ピエゾグラフィ作品による「い
わさきちひろ展」

（安曇野館ノートより）

11月13日(木)

北海道から一人旅で長野へ来まし
た。亡くなった祖母がいわさきち
ひろさんの絵が大好きで、その影響で
このやさしくて可愛い絵が大好きで
す。純粋で大切な何かを思い出させ
てくれるそんな時間となりました。
次回はぜひ、自分の大切な人も連れ
て訪れたいと思います。

11月23日(日)

ずっと来たいと思っていた「ちひろ
美術館」、夫とお腹にいる赤ちゃん
と3人で来ました。もうすぐ母にな
る私は、ちひろが描く絵のようにや
さしい母になりたいと思いました。
そして、子どもにたくさん絵本を
読んであげたいです。また、子ども
と一緒に来たいです。

「相田みつを&いわさきちひろコ
ラレーション展」

於：相田みつを美術館

10月14日(日)

相田さん、いわさきさん、両方共大
好きなので感激しました。どちらも
やさしくて、時には背中をそっと押
してくれる温かさがあった。癒され
ました。（19歳 学生）

10月25日(日)

いわさきちひろとのコラボ、とても
良かったです。子どもの気持ちを大
切にしなくてはいけないと、改めて
考えさせられました。子どもに対
し、なにかにつけ「早くしなさい」
が口癖だった私。その子の良いとこ
ろを見直さなければならぬと思う
気持ちでいっぱいになりました。
（40歳 主婦）

「いわさきちひろ展」

於：ふくい南青山291

都会の喧騒を離れて、心洗われる作
品に触れて感激です。絵のなかで、
4歳10ヵ月で亡くなった娘と出会
えたのもうれしい限りでした。時代
が変わっても、子どもの真実の姿は
美しく、不変なものであると実感し
ました。

12月19日(金)

ちひろの絵のあたたかさ、やわらか
さ、やさしさ。冬晴れの日差しあふ
れる今日。冬たんぽぽのような愛ら
しさをいただきました。

12月20日(土)

純粋なはずの子どもが、戦いの
下ではとても鋭いことが印象的で、
また悲しいことだと感じました。

美術館 日記



11月15日(土)☀

秋のchihiro cinema映画上映会は、
雨の中で歌い踊るシーンが有名なミ
ュージカル映画「雨に唄えば」。「現
代の映画に慣れている今、新しく感
じられ、興味深く観た」、「若い頃
に観たが、改めて観て大変楽しかつ
た」と楽しんでいただけた様子。映
画監督の河崎義祐氏（NPOシネマネ
ットジャパン理事長）の解説、松本
猛館長とのミニ対談も、「時代や制
作背景が分かり楽しい」と好評。

11月22日(土)～12月26日(金)

国営アルプスあづみの公園で、ア
ートライン美術館展が開催。安曇野ア
ートラインに参加している美術館・
博物館のうち、12館の作品が展示さ
れた。当館からも、花とクリスマスを
テーマにしたちひろのピエゾグラフィ
作品10点を展示。今回は、公園のイ
ルミネーションイベント「森の光物

語」に合わせて開催され、約2万人の
方が観覧した。会場では、「思いが
けずちひろの絵を見ることができ
うれしい」との声が。多くの方にち
ひろ作品を観ていただく機会とな
った。

11月8日(土)・29日(土)

木祖中学校、福島中学校の先生と生
徒が美術館を訪れた。生徒たちの手
で取り組んだ文化祭でのちひろ複製
画展（スクールミュージアム）、にじ
み体験やスライドトークを行う出前
授業などの交流を経て、今回の来
館。原画を見ながらのギャラリート
ークや絵本のよみかかせに、生徒た
ちは「絵本や雑誌でみるより、実物
は色が新鮮!」、「説明を聞いて絵を
見ることで、ちひろの表現したいこ
とが、より深くわかった」と新たな
ちひろとの出会いがあったよう。
「家族と一緒に、また来たい」とう
れしい感想も。

11月30日(日)☀

「今日で終わり?ギリギリセー
フ!」「また3月に来ます」とおっし
やるお客様をお送りして、閉館。真
っ赤に色づき、写真スポットとして
大人気だった中庭のニシキギもす
っかり葉が落ち、木の下は紅の絨毯の
よう。今年も無事に閉館最後の日を
迎えられたことに感謝して、明日か
らは3月の開館に向けて準備開始。

1月24日(土)☀

開館中、多くのお客様から「何の工
事ですか?」とご質問をいただいた
新収蔵棟の増築工事もいよいよ大詰
め。冬期休館に入ってからは、展示
室や事務室の改修工事も始まり、そ
のための一時的な引越しも加わって
大忙しの毎日。3月1日のオープン
まであと1ヵ月。よりよい空間、よ
り充実した企画で、お客様を迎え
るべく、あともうひとがんばり。

●次回展示予定 5月15日(金)～7月7日(火)

〈展示室1〉

出版記念展 ちひろ いのちの画集

子どもの幸せと平和を願って描き続けたちひろ。『ちひろ いのちの画集』(講談社)の出版を記念し、生命の輝きに満ちたあかちゃんや子どもを描いた作品、絵本『戦火のなかの子どもたち』の原画などを紹介します。



チューリップのなかのあかちゃん 1971年

〈展示室2〉ちひろの人生

〈展示室3〉世界の絵本画家展

〈展示室4〉

企画展 ミュンヘン国際児童図書館 架空の絵本展

—世界の絵本画家72人が描いた、本のない絵本—
後援：ドイツ連邦共和国大使館、ドイツ文化センター、
(社)全国学校図書館協議会、財団法人日独協会
協力：ミュンヘン国際児童図書館

世界30カ国、72名の画家たちが、自分たちのつくりたい絵本を想像し、その本のための表紙絵を描きました。「本のない絵本」の数々をお楽しみください。

※ちひろ美術館・東京からの巡回展です。



シン・ドンジュン(韓国)
「魚、風、そしてピアノ」より 2007年

〈展示室5〉絵本の歴史

●安曇野館イベント予定

●出版記念展「ちひろと一茶」関連企画

オープニング対談「ちひろと一茶をつなぐもの」

飯島ユキ(俳人)×松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)
信州の俳人・飯島ユキ氏と館長・松本猛が、一茶の俳句の魅力や、ちひろの絵と共通するテーマなどについて語り合います。

※要申込み、定員80名になり次第締切。参加費無料(入館料のみ)



飯島ユキ氏

●出版記念展「ちひろと一茶」関連企画

ちひろの絵で一句。俳句募集!

募集期間：3月1日(日)～5月12日(火)

展示作品8点の中から、絵を選んで俳句をお詠みください。展覧会終了後に賞の発表があります。詳細は当館HPにてご確認ください。

●「フォト×俳句」展関連企画

「フォト×俳句」を語る対談 中谷吉隆(写真家)×坊城俊樹(俳人)

信濃毎日新聞「フォト×俳句」コーナーの選者2人による対談。「フォト×俳句」の魅力や初心者も対象にしたつくり方のポイントなどをお話します。

○日時：4月11日(土) 13:30～

○場所：多目的ギャラリー

※参加費無料(入館料別)、要申込み、定員80名になり次第締切。



中谷吉隆氏

●スライドトーク「夢と記憶の画家 茂田井武」

○日時：4月19日(日) 各日14:00～15:00

※申込み不要、参加費無料(入館料のみ)

当館学芸員が、茂田井武の作品の魅力と人生をスライドで紹介いたします。

●新刊紹介『ちひろと一茶』

ちひろが愛した信州の俳人・小林一茶と、ちひろの絵のコラボレーション画集が誕生しました。

発売日：2009年3月1日

定価：1680円(税込)

発行：信濃毎日新聞社



●ゴールデンウィーク開館情報

4月25日(土)～5月10日(日)のゴールデンウィーク期間中は、無休で開館いたします。(※この期間は、開館時間を18時まで延長します)
5月13日(水)、14日(木)は展示替えのため休館となります。

●3月29日(日) 安曇野ちひろ美術館感謝デー

■入館料無料!

皆様への日ごろの感謝の気持ちをこめて、この日は、すべての方の入館料が無料となります。(イベントの参加費も無料です)

■ワンドリンクサービス!

当館カフェで人気のドリンク(コーヒー、紅茶、そば茶、松川村産りんごジュース)のなかから、好きなドリンク1杯をプレゼント。

■松本猛トークライブ「安曇族を語る」15:15～16:15

当館館長で、安曇野を舞台とした歴史小説『失われた弥勒の手』(講談社)の著者である松本猛が、松川村観松院に伝わる弥勒菩薩や安曇族にまつわる謎について語ります。※終了後、サイン会を予定。(参加自由)

■ソプラノ歌手・清水正美コンサートとみんなで歌おう!

歌声喫茶ともしびのコンサートに加え、来館者のみなさんと一緒に歌うイベントを開催します。

※コンサート終了後、サイン会を予定。(要申込み)

●出演 ソプラノ：清水正美/バリトン：吉田正勝

ピアノ：山田剛史/ヴァイオリン：三ツ木摩理

●午前の部【親子向け】 10:00～11:30

童謡、ポピュラーソング、クラシックまで、世代を超え

て愛される楽曲を中心に。子どもから大人まで一緒に楽しめます。

(大人のみ参加可)

●午後の部【一般向け】 13:00～14:30

ポピュラーソング、クラシック、シャンソンをはじめ、ちひろが好きだったロシア民謡など、幅広いジャンルの楽曲をお楽しみください。



清水正美氏

●4月19日(日) 安曇野ちひろ美術館開館記念日

この日にご来館のお客様全員に、ささやかなプレゼントをさしあげます。

●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日 14:00～/14:30～

展示室にて、作品の解説や展示の見どころ、絵の楽しみ方などをお話します。

●おはなしの会

毎月第2・4土曜日 11:00～

絵本の読み聞かせや素話を、親子でお楽しみいただけます。どなたでもご自由に参加いただけます。

●絵本相談室

毎月第2・4土曜日 11:30～

絵本に関する相談や絵本選びのアドバイス等、絵本に関するお問い合わせを承ります。

CONTENTS

〈展示紹介〉出版記念展ちひろと一茶/生誕100年 夢と記憶の画家 茂田井武…②③

〈活動報告〉2009年 ちひろ美術館の活動について/「フォト×俳句」展紹介…④

ちひろを訪ねる旅⑩/ひとことふたことみこと/美術館日記…⑤

美術館/友の会だより No.55 発行2009年3月1日

●安曇野ちひろ美術館